

夢追う球団 もう一つの箕島

集う選手 地域の働き手に

公立校として唯一、甲子園で春夏連覇した和歌山県立箕島高校。かつての名将の教え子たちが「まだ野球に満足していない」と立ち上げた社会人クラブチームがある。約30年を経て「もう一つの箕島」は、地域の課題解決に一役買う市民球団になりつつある。

ゾウに挑むアリ

10月28日、京セラドーム大阪。社会人野球の日本一を決める日本選手権大会の開幕戦に、真っ赤なユニホームの選手たちが現れた。和歌山県有田市に本拠地を置く「マツゲン箕島」。対戦相手は、企業チームの強豪・東京ガスだ。

マツゲン箕島はクラブチーム。選手はスーパーマーケットの店舗で働き、終業後に練習する。ほぼ野球に専念できる大手企業チームとは、待遇などで大きな差がある。「アリがゾウに挑むようなもんや」。その壁の

現したことがある。

名将ら資金集め

尾藤さんは、マツゲン箕島の西川忠宏監督(64)の恩師。西川監督らは約30年前、他の卒業生らと前身となるチームを立ち上げた。その挑戦をアリとゾウに例えた尾藤さんだが、資金集めに動いて

くれ、練習ではノックバットも振ってくれた。この日の試合は2-5で逆転負け。8回目の同大会出場だが、企業チームには未勝利だ。だが平日にもかかわらず、地元からは1500人が応援に駆けつけてくれた。有田市は、「有田みかん」でも知られる漁港のまち。人口は2万5千人を切り、ピーク時から1万人以上減った。地元の箕島高校は19



動画

箕島の「もう一つの」を描いたドキュメンタリー「もう一つの箕島」はこちらから

人材の好循環を

70年代、尾藤さんのもと、甲子園で春夏合わせて4度優勝した実績を誇る。2013年を最後に甲子園から遠ざかっているが、高校と入れ替わるようにマツゲン箕島が実力をつけてきた。企業チームの壁は崩せていないが、クラブチームでは日本一に7度輝いた。

躍進を支えているのは、野球をきっかけに若者が集い、人口減少や働き手不足などの地域の課題を解決する関係性だ。

選手は20代の前半から半ばで、多くが県外出身者。常に40人前後が有田市内の寮やアパートで暮らす。引退した選手が家庭を持ち、定住するケースも少なくない。

有田市の玉木久登市長は「40人の若者に移住してもらおうことがどれだけ大変なことか。最大限の敬意を払いたい」。市のふるさと納税の制度を利用して、チームに寄付で

きる制度もある。選手の雇用を一手に引き受けているのが、主力スポンサーのマツゲン。近畿4府県でスーパーを展開しており、生活を安定させながら野球に打ち込める環境に、多くの大學生が門をたたく。

人材の確保は企業にとっても魅力だ。野球部出身で初めて執行役員となった大北匠央さん(37)は、「環境を整えてチームが強くなれば学生の注目が高まる。さらに良い人材が集まってくる」と好循環を思い描く。

選手は地域の清掃やマラソン大会の運営支援にもあたる。それは試合の応援という形で地域から返ってくる。

「30年かかって『市民球団』という形になりつつある」と西川監督。「箕島や尾藤さんという名前があつてこそ、ここまで大きくすることができた」。チームが本拠地としている球場の入り口には、胸上げされる尾藤さんの巨大な写真が掲げられている。(白木琢歩)



▲春夏連覇を達成し、胸上げされる箕島の尾藤公監督(1979年8月21日、阪神甲子園球場)
▲開店前の店舗で商品を棚に並べるマツゲン箕島の奥田貴太投手(和歌山県有田市)

カラー充実
紙面ビューアー



登録無料